

篠栗霊場のはじまり お遍路のまち・篠栗



歴史をつなぐ祈りのまち
語り継がれる
霊験あらたかな場所

篠栗四国八十八ヶ所 霊場について

弘法大師空海ゆかりの寺院をめぐる、旅をする参拝者を「お遍路さん」と呼びます。篠栗四国も本四国と同じく、八十八ヶ所すべてをめぐる願いが叶うといわれ、多くの方が参拝に訪れています。心の安らぎを求めて、最近では自分探しの旅として訪れる人も多ようです。

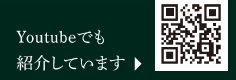


参拝し、功德を積んだ証となる御朱印をお納経帳に集めて巡るのもお勧め。



お遍路道はこの看板がサインです。

篠栗四国八十八ヶ所霊場のはじまりについて



篠栗霊場は約千二百年前に真言宗の開祖である弘法大師空海が訪れた遺跡地(ゆいせきち)に開創された霊場です。この地に霊場が開かれた縁起は、お大師様の時代から時は流れ、江戸時代の末のことになります。

天保六年(一八三五)に、現在の福岡市西区愛宕にあった圓満寺(現在は観音寺)の尼僧慈忍師が四国八十八ヶ所霊場を歩いて参拝されました。その帰り道に篠栗村に立ち寄った際、村民が一人も外にいないことに気づかれました。民家を訪ねてみると、村で疫病が蔓延していることを知りました。更にはこの当時、「天保の飢饉」と呼ばれる全国的な不作も加わって篠栗村の村民はたいそう苦しんでいたそうです。

弘法大師が遺された「吾が杖を留めし処には、必ず化身を残して、その地の衆生を済度せん」という言葉を思い出した慈忍師は、現在の第四十五番札所の横にある平家岩に籠り、断食をしつつ城戸ノ瀧にて滝行と祈祷を行い、ひたすらに村民の救済を祈願しつづけました。やがて疫病も取りまり平穏を取り戻した村人は、心から感謝するとともに慈忍師を生き仏と称えるようになりました。

疫病を収める功力を頂いた慈忍師は、弘法大師が訪れた篠栗の地に大師の御加護が確かに宿っていると感じ、「この地に四国八十八ヶ所の写し霊場を作れば、篠栗のみならず九州各地の人々がそのご利益を享(う)けることができる」と考えました。そこで慈忍師は師を慕う村人たちと共に石仏本尊を刻み始めたのです。

しかしながら事業は難航し十八ヶ月ほど刻んだところで、志半ばに慈忍師はこの世を去ってしまわれました。

その後、篠栗村の田ノ浦に住む藤木藤助氏が慈忍師の霊場開創の遺志を継ぎ、村の有志と共に四国八十八ヶ所霊場を巡る旅に出ました。各札所の砂を持ち帰り、残りの石仏を刻み持ち帰った砂と共に村の各地に祀ることで、この地に篠栗四国八十八ヶ所霊場が開創されたのです。

こうして慈忍師が願われていたとおり、毎年九州各地を始め遠方より多くの参拝者が迷いや災厄を除く拠り所として訪れるようになりました。大師巡錫のご縁と先人の思いで紡がれた篠栗霊場は『心のふるさと』として今もおその灯を伝えています。

【篠栗四国八十八ヶ所霊場公式ガイドブックより】



春を告げる霊場開き
涼を感じる風鈴まつり
多くの参拝者で賑わう秋
雪の涅槃像さる



篠栗四国霊場
第三十九番札所
延命寺
住職 牟田良康

延命寺では、先代住職が始めた篠栗四国霊場お遍路修行(行脚)を四十年以上行っており、お遍路を始めるきっかけは、「自分の願いを叶えたい」「誰かの為という思い」「先祖供養」「自身の修行」など、人それぞれです。お遍路に興味を持ち、実際に参りすることで様々な縁をつなぎ「お遍路とは」「仏さまとは」などの意味が自分自身の中で腑に落ちる瞬間がどなたにもあります。

私も新型コロナウイルス感染症流行の際は、日常生活が決して当たり前ではない事、仏教で言えば『諸行無常』を深く実感し、やはり心の支えになったのは、信仰であり仏さまの存在でした。

人生の岐路に立つ時、心によどみが溜まりそうな時には、ぜひ篠栗四国霊場に足を運んでみて下さい。

仏に触れ、人情に触れ、自然に触れていると、忘れていた「ありがたさ」や「感謝」の気持ちを思い出すと共に、かけがえない「何か」をみつけることができるはずですので、篠栗四国霊場でお待ちしています。

合掌

お遍路を始める皆さまへ